

## 小特集「ソフトウェア ツール 2—製造・評価・保守」 の編集にあたって

國井利泰<sup>†</sup> 齋藤信男<sup>\*\*</sup> 原田賢一<sup>†††</sup>  
大野徇郎<sup>††††</sup> 東基衛<sup>†††††</sup>

ソフトウェア工学において、いろいろの問題に対して、それらを解決すべき方法論がいくつか提案されている。これらの方法論が計算機システム上でツールとして実現されたとき、初めて実際のソフトウェアの開発に有用なものとなる。

この小特集は、6月号の「ソフトウェアツール1—設計・記述」の続きである。ソフトウェアのライフサイクルに沿って、ソフトウェアツールを分類したとき、前半の設計・記述の段階では、概念的な色合いが強いのにに対し、後半の製造・評価・保守の段階では、実践的な色合いが強い。すなわち、一つの体系としてきれいにまとめるのは難しいが、実際のソフトウェア開発に際しては、必須のものであり、その切れ味によって開発の能率が大きく左右されるものが、製造・評価・保守のツールである。

ソフトウェアライフサイクルに沿った種々のツール

が、一つの体系に基づいて作られていれば、開発する側にとっては、大変使い易いものになるであろう。最近の言語処理系では、単に翻訳系だけを実現するのではなく、デバッグ系、編集系など、まわりの環境の整備もして、プログラミング系として使い易いものにしようと試みることが多い。将来のソフトウェア・ツールも、ソフトウェア開発系としてまとめられるのが、望ましいであろう。

6月号および本号の小特集は、本年1月のソフトウェア・シンポジウムの講演に基づき編集したものである。全部で9つのセッションがあったが、各セッションから原則として一人ずつ代表を選び、とりまとめをお願いした。執筆者には、シンポジウムの講演および小特集の原稿作成と、二つのお世わをおかけしたが、熱心に御協力頂き、二つの小特集をまとめることができた。ソフトウェア工学シンポジウムの開催に御協力頂いた発表者諸氏およびソフトウェア工学連絡会の委員の方々に対して、深く感謝の意を捧げる次第である。

(昭和54年7月18日受付)

† 東京大学(理)情報科学科  
 \*\* 慶応義塾大学(工)数理工学科  
 ††† 慶応義塾大学情報科学研究所  
 †††† 協同システム(株)企画本部  
 ††††† 日本電気(株)情報処理システム支援本部